

幼児期における遊びの中の伝え合いⅡ－教師の援助についての一考察

菅野良美(東京家政大学大学院生)※

1. 問題の所在と目的

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」¹⁾の1つとして「言葉での伝え合い」が挙げられ、その重要性に関する認識は高まっている。筆者は、第70回大会において、遊びの中の幼児同士の伝え合いの特徴を明らかにした。²⁾では、遊びの中の伝え合いでは、教師はどのような役割を担っているのだろうか。

本研究では、幼児期の遊びの中の伝え合いを支える教師の援助について明らかにすることを目的とする。

研究方法と倫理的配慮

公立A幼稚園5歳児クラスを対象とした。2015年4月～2016年3月まで保育を観察し、筆記及びICレコーダーによる記録を行い、フィールドノートを作成した。事例の使用について園の許可を得るとともに、園名、個人名等を特定できないよう配慮した。

2. 事例と考察

本発表では、2015年11月の事例における教師の援助について考察することとする。

事例「ダンスを見ながら食べられるお店」(一部抜粋)

教師 「すみません、ここでダンスを見ながら、ごはんが食べられるって聞いたんですけど」
B 「あ、どうぞ～」
教師 「こっち？」
B 「こっちです」
教師 「(椅子を指して) ここですか？(座る)・・・ごはん・・・(椅子と机が舞台を背にしているため) え、ダンスが見えないんですけど・・・(笑う) ①」
C 「あ、じゃあ、椅子こっちにすばいいいんじや」
教師 「ちょっとやってみてください。ダンスが見たいです！」
A 「椅子こっちにすばいできるよ、せーの！よいしょ」
(A・B・C、椅子を反対側に移す)
B 「はい、終わりました！」
教師 「ああ、これいい。食べながら見られる。おそばが食べたいんですー。あ、メニューあるの？」(メニューを見る)
教師 「そば。そばください、そば！あと、ジュース」
A 「スペシャルもあるよ②」
教師 「メニューとダンスもあるの？」
A 「(メニューをめくり) スペシャルはこっちです」
C 「ピリ辛のスペシャルだよー。ピリ辛です」
A 「ピリ辛のスペシャルです」
教師 「それがいいです。ピリ辛がいいです」
C 「ピリ辛、ちょー辛いよ」
教師 「食べたことあるの？」
(C、うなずいて笑う)
B 「あるよー (B、歌をくちずさむ)」
A 「紅茶もあります」
教師 「なににな」
A 「紅茶も」
教師 「あー、紅茶も欲しいな」
A 「たこ焼きはどうですか」
教師 「スペシャルメニューにたこ焼きもあるの?!」
B 「あと、大盛り！」
教師 「わあすごいスペシャル③」

幼児が思いや考えを伝え合うための援助と言うと、参加している幼児全員が発言できるように促す等、直接的に働きかける援助が思い当たるが、本事例では次のような間接的な援助が見られた。すなわち、伝え合いを活性化させる状況作り(課題を焦点化する状況作り、聞き合える状況作り)である。

本事例においては、幼児が思いついた「ダンスを見ながら食べられる」というイメージが、遊びの核となる重要なイメージである。それにもかかわらず、実際にはダンスを見ることができない状況にある。そこで教師は、客として席に座りながら、ダンスが見えないということに気付かせ、伝え合うべき課題を焦点化している(下線①)。幼児が気付けずいた部分であり、この遊びにおいて重要な部分に焦点化することにより、対応策について伝え合いが生まれた。幼児は遊びの中で、しばしば自分たちの思いがある部分について伝え合い、伝え合うべき課題に気付かないこともある。そのため、教師は遊びの核となる課題を焦点化する状況作りをする必要があり、そうすることにより、遊びの文脈に沿った伝え合いが生まれることが明らかになった。

さらに、課題を焦点化する状況作りにより、伝え合いを経てイメージが実現する楽しさを感じると、さらに自分たちが考えたことを伝え合いたいという気持ちが生まれる。抜粋した事例より以前の場面で、幼児同士でスペシャルメニューについて伝え合い、検討する会話があった。そのことを知らない教師にその際に伝え合った内容や、新たに思いついたイメージを伝えたいという気持ちから、下線②以降の会話が生まれたと考えられる。

また、下線②～③までのやりとりを経て、その場にいる幼児が伝え合いを通して「スペシャルはピリ辛、紅茶付き、たこ焼き付き、大盛りも選択可」という共通理解に至っている。つまり、教師が伝え合いに加わることで、教師は幼児との会話を、他の幼児も聞き合える状況作りをし、伝え合いが活性化させる援助をしているのである。

思いや考えを伝え合い、より遊びが楽しくなる経験を積み重ねることで、幼児の自信にもつながる。伝え合いと遊びが楽しくなるということが分かり、幼児が自ら、より伝え合えるようになっていくと考えられる。

最後に、教師は「伝え合いはいかに成立し、遊びの楽しさの創出に貢献できるか」を示すモデルとなっていると考えられる。これを、幼児がモデルとすることで、さらなる伝え合いの活性化につながるが予想される。

以上のことから、幼児同士の伝え合いを支える教師の援助について、伝え合いを活性化させる状況作りの重要性が示唆された。

※人間生活学総合研究科 児童学児童教育学専攻

【引用文献】1)幼稚園教育要領(平成29年告示) 2)鹿野良美(2017)「幼児期における遊びの中の伝え合い」日本保育学会第70回大会要旨集